

20088

Drug-coated stent (DCS) Biofreedom の留置後 2 カ月の血管内視鏡所見

2017 年 10 月に、ポリマーフリーによるベアメタルステントの安全性とバイオリムス A9TM 塗布による薬剤溶出性ステントの有効性を兼ね備えた新しいステントである DCS「BiofreedomTM」が発売された。DCS の高出血リスク群に対する有効性は、LEADERS FREE 試験により早期 DAPT 中止の点において報告されており、ST 上昇型心筋梗塞<STEMI>のような術前に出血リスクの判定が困難な症例において有効であると考えられる。当院においても急性冠症候群<ACS>に対して積極的に使用されている。今回、急性心筋梗塞に対し留置した BiofreedomTM の留置後 2 カ月の新生内膜の状態を血管内視鏡および OFDI にて観察し得たのでここに報告する。症例は 60 歳代男性。仕事を終え帰宅後、両肩のだるさが出現。その後胸痛を自覚し当院へ救急搬送された。来院時心電図で前胸部誘導の著明な ST 上昇を認め、STEMI の診断で緊急カテーテル検査となった。冠動脈造影の結果、左前下行枝に完全閉塞を認めたため、引き続き経皮的冠動脈形成術 I を施行した。血栓吸引後、BiofreedomTM を留置し、良好な血流を得て急性期治療に成功している。留置 2 カ月後に、ステントの新生内膜の被覆状態を血管内視鏡および OFDI を用いて観察した。血管内視鏡所見では、ステントストラットが全て新生内膜で覆われていなかったが、OFDI 所見では、ステントストラットは均一な新生内膜で覆われていた。Biofreedom は早期にステントストラットが新生内膜で被覆されることから ACS に対して選択されるべきステントと考えられた。